

マーソンの時間社会学の可能性

辻 正二

1. はじめに

アメリカの代表的な社会学者であるロバート・K・マーソンが2003年2月23日に92歳で他界した。マーソンは、アメリカが生んだ20世紀の偉大な社会学者の一人であった。彼は学士院会員に選ばれた最初の社会学者であり、1994年にはアメリカ大統領から栄えあるアメリカ国家科学賞を受賞した社会学者でもあった。彼が残した業績は、1冊の大著からなるというより、ほとんどが短い論文であった。しかし、彼の主著『社会理論と社会構造』は、科学的な知の宝庫であった。彼の追い求めた社会学は、理論から調査、科学から思想やイデオロギー、方法論から政策論まで実に多岐にわたっていた。言い換えれば、彼ほど社会学の研究分野で幅広く研究し、それぞれの分野で影響を残した人はいなかったといつてよいであろう¹⁾。そして、彼をして有名にしたのは、1940年代に主張した中範囲の理論の提唱とその進展への寄与であり、掘り出し型、予言の自己成就、アノミー論、相対的不満、役割群、地位群、顕在的機能・潜在的機能、マタイ効果など実に多くの社会的なジャーゴン（専門用語）を残したことによるものであった。そのことは彼への記念号や追悼の文章をみれば明らかである²⁾。

しかし、マーソンの残した業績は、これまで潜在的機能や逆機能まで視野に入れた構造機能主義理論、彼が創始した科学社会学、逸脱行動論に大きな影響を与えたアノミー論、予言の自己成就論などには関心がもたれ、研究されてきたが、彼の時間の社会学的研究に関してはあまり注目されてこなかったように思われる。

本稿では、これまで我が国ではマーソンの時間社会学に関する研究が皆無に近かったので、彼の時間の社会学研究がどのようなものであったかを示す。マーソンの時間社会学を学説史的内容に触れながら、彼の時間社会学の可能性を考察してみたい。その際、初期の時間社会学への関心と後期の時間社会学の関心の違いがどこにあるかも検討したい。

2. マーソン社会学に占める時間の観点

マーソンの時間の研究を捉えるには、まず、1930年代の彼の社会学のテーマや視点に注目する必要がある。彼の30年代の社会的な著作には幾つかの時間社会的関連領域が浮かび上がる。一つは、ハーバード大学での恩師の一人ソローキンが壮大な実証的な歴史社会的な研究を構想しており、それを手伝い、触発された形で研究した歴史社会的な研究であり、二つ目は、フランス社会学とドイツ社会学などのヨーロッパ社会学の研究から導き出された科学社会的、知識社会的な研究であり、三つ目は、二つ目とも関係するが、

いま一人の恩師の T. パーソンズなどに影響を受けながら行為理論と機能分析への関心を示す研究に見出すことができる。

以上のうち科学社会学や知識社会学、さらには彼の行為論や社会学理論は、1940年代には結実する。マートンにとって30年代の「初期」の研究は、彼の新しい社会学の構想期であったといつてよいであろう。

(1) 社会変動への視点と行為理論

まず、マートンは1934年に「最近のフランス社会学」という論文を書いて学会に登場した。この論文は、デュルケーム学派とタルドの社会心理学の研究を中心にしながら現在のフランス社会学の動向を紹介し、そこでの課題を指摘することが中心となっているが、同年に出された「デュルケームの社会分業論」は、英訳された『社会分業論』への書評論文であった。この論文はデュルケームの『社会分業論』を科学方法論の角度で論じたもので、デュルケームの「機械的連帯」から「有機的連帯」へと単線的に変動するという考えを一部支持するものの、そのもつ概念構成から分析したものである。2年後の「文明と文化」（1936年）という論文では、当時、オグバーンとマッキーバーの間で論争となった文化＝文明論争に関して、マッキーバー側に立って、文化の持つ力点を主張した。この時も、マートンは、質的な側面を重視している。

以上の3本の論文は、学説論的な研究であったが、この時期に一番理論的で、後の彼の理論に結びつくのが1936年に発表された「目的的社会行為の予期せざる結果」という論文である。この論文の狙いは、因果帰属の問題と予期しない結果の源泉を探ることにあつた。

マートンによると、目的的行为の諸結果は、行為の帰結により生ずる状況の要素に制約を受ける。つまり、行為の相互作用や客観的状況（行為の状態）、ある条件下の行為の総体的な結果である。その意味で、目的的行为とは、人間行為の合理性（つまり、人は常に彼の目的を達成するために客観的にもっとも適切な手段を利用する）を意図したものである。

彼によると、予期しない結果を導き出すのは、「無知」、「誤解」、「利害の性急な直接性」、「基本的価値」、「自滅的予言」の5つの要因であるという。これらの要素は行為者が目標を達成するときに予期しない結果を引き起こす要因である。そして、これら予期しない結果は、社会変動の原因となる。ウェーバーが『プロテスタティズムの倫理と資本主義の精神』のなかで考察した予期しない結果は、「基本的価値」がもたらしたものである。マートンが、後に「予言の自己成就」という論文で示した考えは、ここでの「自滅的予言」の考えを発展させたものであつた。

ただ、マートンの目的的行为理論は、行為から目標達成までの経過を説明するものであつた。しかし、それは、さらに社会関係論や集団論へと展開しようとする意図をもつものではなかつた。この行為論は、後にマートンの機能分析のアイデアに結びつくものとなる。

マーソンの目的的行為論は、パーソソズノ行為論ノように一般理論に向けてノものではなかつた。

(2) ソローキンとの共同の研究

30年代ノいま一つノ研究は、ソローキンノ影響下で彼ノ仕事を手伝うなかで生み出されタ研究である³⁾。合計4本ノ論文が直接にはこの種ノ研究である。1930年代に書いた論文ノうち「産業ノ發明率における波動」(1935)、「アラブノ知的な發展ノ進路：AD700~1300年：方法ノ研究」(1935年)、「發明、発見、科学理論ノ社会学的アスペクト」(1937年)は、30年代ノ業績中では数少ない実証的な研究成果である。このうち、後ノ2本ノ論文は、ソローキンとの共著で、この論文そのものは、後にソローキンノ『社会的・文化的動態』に収められた⁴⁾。

二人で書いたもので一番理論的なものが1937年に発表された「社会的時間：一つノ方法論的そして機能的分析」であつた。この論文はマーソンにとってハ彼が時間を考察した最初ノものであり、副題に機能分析という言葉があることからわかるが、彼にとって機能分析ノ視点を最初に提示したものである。

(3) 科学社会学ノ構想

三番目ノ研究は、科学社会学ノ研究である。この研究は、二人ノ師ソローキンやパーソソズに影響を受けながら、彼自身が研究していたE.デュルケームやM.ウェーバーやK.マルクスなど、フランス社会学とドイツ社会学ノ研究から構想されたもので、直接的には当時、ハーバード大学にいた科学史家ノG.サートンノ下にあつた膨大な資料を使つてノ研究であつた。そして、最終的には「17世紀英国ノ科学・技術・社会」という彼ノ博士論文に結実した。マーソンが1935年に発表した「科学と軍事技術」、翌年発表した「ピューリタニズム、敬虔主義、そして科学」、その翌年発表した「科学、人口、そして社会」、そして1939年に発表した「17世紀英国ノ科学と経済」は、いずれも博士論文で考察した三つノ仮説を検討したものであつた。そして、これらノうち「科学と軍事技術」は、マルクス主義的な立場ノ科学史家ノヘッセンノ主張ノ検証であり、「ピューリタニズム、敬虔主義、そして科学」は、M.ウェーバーノ立場ノ検証、「科学、人口、そして社会」は、デュルケームによる人口統計ノ検証を行うものであつた(辻正二 2001)⁵⁾。そして、1938年に書かれた「科学と社会秩序」は、現代社会における科学ノエートス(普遍主義、公有性、利害ノ超越、系統的懷疑主義)が相互に対立した価値となっていることを説き、科学における規範的構造ノ研究を意図したものであつた。

他方、この時期マーソンが関心をもつていたいま一つノ研究は、「知識社会学」ノ研究であつた。知識社会学は、1930年代にドイツを中心に文化社会学ノ一つとして隆盛を極めた。マーソンは、フランス社会学ばかりでなくドイツノ社会学にも関心を持つていた。1937

年に書いた「知識社会学」という論文は、ドイツの知識社会学者グリウンヴァルト、シェーラー、マンハイムなどの動向をいち早く伝えるものであった。知識の進展を意識しながら、知識の存在被拘束性の性格を捉える、新たな社会学の動向をアメリカ社会学界に紹介しようとした。つまり、この時期の科学社会学や知識社会学の研究は、ある意味ではマーソンの歴史意識を色濃く反映していたといえることができる。

3. マーソンの初期の時間社会学

ところで、先にも触れたように、マーソンが時間社会学の考え方を初めて提出したのは、師であるソローキンと一緒に書いた1937年の「社会的時間：一つの方法論的・機能的分析」という論文においてであった（Sorokin and Merton 1937）。後にマーソン自身が語っているように、この論文はソローキンがアイデアを出し、マーソンがまとめたものであった（Di Lellio 1985: 19）。

二人がこの論文で意図したのは「社会動態領域で時間を単純な概念に限定することは、幾つかの基本的欠陥を持っていることを、証明すること」であった（Sorokin and Merton: 616）。この論文は、明らかにニュートン力学に立った時間概念とは別の社会的時間概念を確立することにあつた。

彼らによると、アインシュタインの相対性原理の登場により、ニュートンの時間の概念が普遍妥当性を持つとする絶対的な時間の捉え方はいまや批判されており、こうした考えは心理学や経済学にまで及ぶ。これに対して、社会学では、デュルケーム学派の幾人かの研究者を除くと、時間の基本的範疇に関する関心がほとんどもたれなかった。

ソローキンとマーソンによるとわれわれの日常の活動の経過には表示の時間点が使われる。例えば、「第二次世界大戦後直ちに」、「私はコンサート後にあなたに会うだろう」という言い方は、いずれも天文学的準拠枠というより社会的準拠枠に関連している。こうした枠組は天文学的枠組ないし暦学的枠組と全く違うことを表す。例えば、暦的な準拠そのものは、それが社会的時間に置き換えられた時だけ、意味をもつという（ibid.: 618）。

さらに、集団の社会生活は時間表示に反映される。日や月や季節の名前や年度の名前でさえも、集合的生活のリズムによって決定されるので、活動の社会的鼓動や振動の同質性は天文学的な準拠枠を必要としない（ibid.: 619）。「セミナーの間」と「労働時間の間」というこの持続期間と天文学的現象との間には、社会的インターバルが独立に変化するので、密接な関係は存しないという（ibid.: 619）。

さらに二人は、時間のシステムは、社会構造と共に変化するという。天文的時間は、同一であり、均質的であるが、それは純粹に量的であり、質的なヴァリエーションを欠いている。社会的時間には聖なる日があるのである。‘幸運な’日や、‘不運な’日などといった市民的作用の特別な行事に帰せられる日がある。例えば、イスラム教徒にとっては月、

水、木、金は吉日と考えられ、火、土、日は不吉な、不運な日と考えられる。これらは社会的事実である (ibid.: 621)。このように、マートンたちは、社会的時間が質的であって、純粹に量的なものともみることにはできないという。

この時間単位の出現や拡散は、常にある周期的に見いだされる社会的な事件に関連しており、天体の観察によるものではなかった。宗教的儀礼、季節ごとの祭り、狩猟、市など、それらのすべては、定まった時間に大多数の人々の複雑な協力を要求するが、ある厳密に規定された時間表示の体系の起源なのである (ibid.: 626)。自然現象が時間の間隔の限界を指す場合でも、その選択は、それらが集団に対してもつ利害と効用に基づいている。量的アプローチは「人間の精神がとにかくどんな顕著な暦の日でも異常な価値を付与する傾向がある」という事実を軽視する (ibid.: 622)。

時間の判断には、傾向、機会、持続性、恒久性、類似性の考察が入り込むが、時間間隔に帰属する等価値は、必ずしも等しい測定であるわけではない。質における違いは、時間の持続時間の絶対的な長さのみならず、それらの質のもつ性格と密度にもとづく相対的価値の依存に導く (ibid.: 622)。

「時間のシステムは、無数であり、変化する。またそれは違った性格をもつ出来事にうまくあてはめることができると変化する。……………全ての時間システムは、集団の構成員の活動や観察を同調させ、調整するための手段を提供するニーズに還元されるかもしれない。地域的な時間システムは、集団の違いの程度、機能、活動によって変化する。集団内の相互作用の拡散により共通のまたは拡大した時間システムは、地域的な時間システムによって取って変わるために考えだされなければならないし、あるいは増大するために考え出されなければならない。社会活動のリズムは違った集団では異なるし、また同じ高度に分化した社会の中でも異なるので、時間測定の地域システムは、もはや正確ではない。」と述べ (ibid.: 627)、「我々は、ある純粹に質的な、統一的な、同質的な時間の概念の決定にあたって重要な社会的要素を考える。つまり、一次元的な天文学的時間が主として多次元的な社会的時間へと代用されたようなことを考えなければならない。」その意味では「社会動態の分野での研究を促進し、強化するためには、社会的時間の概念が、たとえて代わるものでなくとも、天文学的時間の補助として再導入されねばならない」という (ibid.: 628)。そして、最後に、「もし社会変動の時間的側面や社会過程の知識を高めようとするのであれば、社会的時間の概念を含む我々の時間カテゴリーを拡大しなければならない。」という (ibid.: 629)。

ソローキンとマートンは、以上の社会的時間論によって時間の持つ運動性以外に、時間の成立の契機として時間の準拠枠を形成する社会的活動や相互作用の役割を指摘し、時間測定や時間呼称のもつ意味づけを挙げている。そして、社会的時間が数学的、量的な概念ではなく、質的な概念としての特徴をもつことを言っている。この論文は、副題に方法的・機能的分析とされているように、マートンにとって、この初期の時間社会学は、デュ

ルケームの社会的時間論である聖俗の二分法を深化させ、天文学的・曆的時間論にリンクする社会的時間論を提起したものであったといえることができるであろう。

4. マーтонаの後期の時間社会学：社会的に期待された持続時間

1950年代にアメリカでパーソンズなどを中心に構造機能主義やシステム論の社会学が隆盛したとき、マートン自身は、社会構造の研究を精力的に行っていた時期である。ツトンプカによると、マートンは中範囲理論の立場で独自の機能分析や構造分析の研究を進め、時間分析の必要性を強調するようになったという（Sztompka 1986: 152）。

マートンが最初に時間的視点を主張した「社会的時間」論は、ソローキンと一緒にデュルケームの社会的時間の概念を体系的に整序し、自身の時間社会学の研究にとってもそれは、30年代の彼のさまざまな社会学研究を位置づけるためであった。ところが、1950年代になって彼は、研究対象を歴史社会的な対象領域から、官僚制組織、病院組織、新興の住宅地のコミュニティなどの社会的現実の研究対象に移していくようになる。その中で、個人行動と社会構造を機能的に結びつけ、その間でアンビバランスや矛盾を生むような問題（構造的緊張）に関心を示すようになる。この時、マートンが一番力を注いだのは、当時、社会心理学で注目されだした「準拠集団」の研究であった⁶⁾。

最初、1950年にロッシと共同で書いた「準拠集団行動の理論」において彼は、準拠集団行動の中で非所属集団への積極的指向をもつ「将来を見越した社会化」という時間概念に注意を喚起している（Merton 1968）。その後1957年に「準拠集団と社会構造の理論」という論文の中に「準拠集団行動と時間」の一節を組み入れる。この節で、マートンは、集団所属の暫定的リストとして26個の項目を挙げ、非所属に対する時間的展望（Merton 1968: 267）を扱ったその中で、「集団所属の現実的持続時間」、「集団所属の期待された持続時間」、「集団の現実的持続時間」、「集団の期待された持続時間」の4種類の持続時間類型を指摘している。これは、所属と非所属、現実と期待の二つの軸から持続時間を考えるべきと指摘したにすぎず（Merton 1968: 366, 邦訳 283頁）、この時には詳しい考察をするまでには至らなかった。

それから4分の1世紀経った1982年にアメリカ社会学会で、マートンは「社会的に期待された持続時間：社会構造の一時的構成要素」という論文を発表した。そして、この論文を、2年後に弟子のコーザーの記念論文集に書き改めて発表した。これが彼の後期の時間社会学である「社会的に期待された持続時間」論である（Merton 1984）。

「社会的に期待された持続時間（Socially Expected Duration：以下、この概念をSEDとして表記する）」とは、マートンによると「いろんな社会構造に組み込まれた時間的な持続期間に関しての社会的ないし文化的に、パターン化された期待」を指すものである（ibid.: 278）。彼によると、この概念は、ある組織または特別な地位にある職員のように諸個人が制度的に特別な地位を占めることを許可された時間の長さ、友人関係や専門者と顧客の関

係のような、さまざまな種類の社会関係で想定された妥当な持続時間、それ故個人が占める地位、集団、組織の予期される占有の長さが該当するという。

この論文では SED の「原初的な概念(proto-concept)」から SED 概念の確立されるまでに関与した 7 つの研究に触れている⁷⁾。彼によると、SED 概念は、その研究のルーツをデュケームと彼の伝統にもち、モーリス・アルバックス、ソローキンの社会的時間研究（マーソンの初期の研究）、ラザースフェルドたちのマリエンタルの時間志向研究⁸⁾、マーソンの大衆説得の研究（原初的な概念としての SED）、マーソンのクラフトタウンの研究（実際の持続時間と期待された持続時間）、ロッシの居住移動と期待された持続期間の研究を経て形成されたという。つまり、デュケーム学派の社会的時間に始まり、以後ソローキン、ラザースフェルド、そしてマーソン、マーソンの弟子へと引き継がれていく中で SED 概念は次第に整序され、1980 年初頭にマーソンが概念的に規定し成立したものである。彼は、以上の研究業績を「原初的な概念(proto-concept)」から「概念」への流れを跡づけた後で、初めて SED の概念の狙いや課題を語る。

マーソンは、この概念が現代社会を分析するために不可欠と考えている。つまり、彼によると、「この SED は、複雑な社会の社会生活ではあちこちに存在する。それらは、政治や他の組織的構造では「任期終了間近かのパターン」のように社会現象から表面上影の薄い存在になる。この例は、結審の禁固刑の結審者や未結審者、長引く病気と終末の病気、有効期限の法令、学問領域などでのさまざまな種類の終身在職期間、締め切り、科学における師弟関係、組織における地位の系列や継続性、時間に拘束されたスポーツや拘束されないスポーツなど、いずれも社会構造の大きな流れや時間的にパターン化された出来事などを通して確認できるものである (ibid.: 279)。」そればかりでなく、この概念は機能分析、構造分析を繋ぐものでも考えている。彼によると、SED は、幅広い視点に立つと、結果として引き起こされるもので、それらは、集団や個人やそれらの役割群や組織群における現在の行動に有意に影響を及ぼすところの一群の社会的期待を構成している。目的的な社会行為が有意な未来と考えられるさまざまな先を見越したものを含むなら、そして、社会構造が地位と役割の諸形態で社会的に支持された規範的な期待とかみ合ったネットワークを構成するなら、SED は、社会構造や個々の行為を結びつけるパターン化された期待の基礎的部類を構成するという。次いで、マーソンは SED の概念が構造的特質をもつものとして考える。「われわれは社会生活のあらゆる場面で、そして大概多様な形態で SED を経験している」という (ibid.: 278)。

以上からマーソンは、SED の概念のなかから三つのタイプの SED 概念とそれぞれの問題構成を述べる。まず、彼によると、第一のタイプは「構造的ないし制度化された持続期間」で、この場合は、権威や権力により規定され、支持されているので、このタイプは、監獄や学校や軍隊のような構造にみられるという。そして、この場合、持続期間の可視性や相対的予測性が、その組織のメンバーやこれらの組織に志向する非成員の現状から先を

見越した行動が形づくられるという。第二のタイプは、「集合的に期待された持続時間」である。このタイプは、危機や連立政府がどれだけ持続するかについての豊富な予測、千年王国的運動やパニックなど集合行動を生むが、この場合、比較的の不確かなものである。マートンが戦時中分析したケート・スミスの戦争債券募集も、この種のタイプのものではあった。第三のタイプは、「パターン化された一次的な期待」である。このタイプは、いろいろなタイプの対人的関係や社会関係に見出される。前もって決められ、それゆえ相対的に予測可能な持続期間である。機能的には企業の取引のようにゲゼルシャフトな関係に適合するが、友人関係や結婚のようなゲマインシャフトな関係とは矛盾するという。そして「ある種の SED の形態が採用されるのはどのようにしてか?」、「SED がもつパラメーターは何か?」、「それらの SED が組織的行動や個人的行動のパターンに影響を及ぼすのに、どのようにして社会構造の時間的な構成要素として働くのか?」という課題を指摘した (ibid.: 281)。

マートンの後期の時間社会学は、初期の研究のような歴史意識を持った社会変動の考察に使うものではなく、中範囲の理論の立場から、範例を使い、機能分析と構造分析を考慮した社会時間研究であった。

5. マートンの時間社会学の可能性と課題

ここまで、マートンの 1937 年の「社会的時間」論と 1984 年の「社会的に期待された持続時間」論の二つを紹介してきた。前者の初期の研究と後期の研究には明らかに大きな違いがある。初期の研究は、ソローキンと一緒に書いたものであるが、明らかにフランスのデュルケーム学派の時間社会学を意識し、その研究を発展させることを目指したものであった。もちろん、マートンが語っているように恩師ソローキンの研究課題、つまり、ソローキンが構想していた『社会的・文化的動態』という著書への理論的バックボーンに当たる研究であったといえる。マートン自身にとっても「17 世紀英国の科学・技術・社会」という科学技術を歴史社会的に考察する、彼の博士論文の研究課題とも関係していた。ソローキンとマートンの「社会的時間」論は、物理学においてニュートンの時間論がインシュタインによる相対性理論によって塗り替えられた時に、社会学において時間概念をただ単に物理学的時間だけで考えるのではなく、社会的な時間概念を積極的に表明し、新たな社会的時間研究の必要性から書かれたものである。このことは、ある意味では、ヨーロッパに遅れて出発したアメリカ社会学が新大陸の新しい地で、社会学の自己確立を表明した研究成果と解することができるかもしれない。その点では総合社会学を目指した当代一流の大学者ソローキンと、ヨーロッパ社会学研究では若手のホープであったマートンとが一緒に連携して書き上げた論文が「社会的時間」論であった。彼らは、社会的時間が天文学的、時計的な時間のように量的性格を持つのではなく、社会的相互作用や社会の変動に関係した質的性格をもつことを主張したのであった。この研究は社会学の領域で考え

ると、明らかに実証主義的研究、社会変動論、科学社会学、知識社会学などと関連して、それらの研究を後押しすることのできるものであった。

これに対してマートンの後期の時間社会学的研究は、彼の半世紀以上の社会学的研究の進化の中で自己意識され、新たな社会的時間論として提出されたものと解される。後期の「社会的に期待された持続的時間」という論文は、1950年代にすでに萌芽的に研究視角として気づかれてはいたが、マートンがそれ自体を推し進めなかつただけである。

彼はこの論文を弟子であり、彼とよく似た仕事（編集者）をしたコーザーの記念論集に収めたのには理由がある。それは、巻頭でも記しているが、マートンと同じくコーザーも「パークの公理」に気づいていたからである。「パークの公理」とは、ケネス・パークが言った「見る方法は、見ない方法である」という格言、つまり人はAに集中すると、Bを見なくなるという認識論上の落とし穴を指している。彼がこの公理を何度となくこの論文で使うのは、まさに学会報告した1982年（72歳）まで重要さを気づかなかつた自分への戒めかもしれない。このSED論文は、丁寧にも概念の確立史に紙面の多くを割いている。後は、後世の研究者にゆだねるという形で範例の進展が期待された。

後にイタリア社会学会向けに語ったインタビューで、彼のSEDの概念が有効かどうか聞かれた際、彼は「社会的に期待された持続時間の明確なタイプは、高度産業化社会では、倍加し、濃密化する」と答えている（Di Lellio : 3）。論文の中で彼が指摘したのは、「結審の禁固刑の結審者や未結審者、長引く病気と終末の病気、有効期限の法令、学問領域などでのさまざまな種類の終身在職期間、締め切り、科学における師弟関係、組織における地位の系列や継続性、時間に拘束されたスポーツや拘束されないスポーツなど」の研究である。恐らく、変化の激しい現代社会において限られた時間という断片に生活することを余儀なくされた現代人の持続時間を研究するのがSEDの概念が考える世界ということになる。

そして、彼自身が指摘した研究領域は、「社会的に規制された持続時間」、「集合的に期待された持続時間」、「パターン化された一時的な期待」の3種類であった。ただ、残念ながらSEDの視点を使った研究は、これまであまり多くはない⁹⁾。ブリアン R. ロベルツ（Bryan R. Roberts）の「社会的に期待された持続時間と移住者の経済的適応」という論文は、マートンの「社会的に期待される持続時間」という概念を使った数少ない研究である（Roberts :1995 : 42-86）。

ロベルツは、移住者の経済社会学的研究にこのSED概念を中心的に扱い、恒久的移民、一時的移民、そしてそれらのミックス形態の移民の3パターンを分析している。彼によると、移民にとっての移住は、将来に向けての期待が確実のものではない。多くの移民にとって、移住は、臨時のもので、一時的期間で存在するものと期待される。メキシコ移民は、ヨーロッパから来たアイルランド移民とメキシコ移民、ポーランド移民、イタリア移民と違いSEDが一時的移民になりやすく、そのことが経済的成功につながらず、いつまでも本

国と家族・親族のネットワークに比重を置いている。そして、これに SED が関係していると言う。

この社会 (Society)、期待(Expect)、持続時間(Duration)の要因をもつ SED の概念は、分析的に考えると期待の箇所に、初期の社会的時間概念と違うところがある。なぜなら初期の社会的時間概念には社会も持続時間も中心的に組み込まれているからである。その点では期待という要因がこの SED 概念の特徴となる。

イタリアの社会学者 S. タボーニは、「時間の社会学的研究に対する R. K. マートンの貢献」という論文のなかで、マートンの SED の時間社会学を検討している。彼は、マートンの SED の考えが社会理論に時間のテーマを導入したと評価した後で、欠点を挙げている (Tabboni 432)。彼によると、マートンは時間が社会構造の一部だということに十分に気づかせたけれども、彼のアプローチのインパクトはこの概念の起源と進化を考察するのに彼が失敗しているので、鈍ってしまった。その理由は、個人の経験の側面を軽視し、個人の時間の経験が歴史的に条件づけられるという事実を軽視しているからである。タボーニは、最終的にはドイツ系の時間社会学の流れと断絶しているところにあるとみている。特に、コゼレクの時間構造の研究が「期待」以外に「経験」を取り入れている点を高く評価している。

これに対して、マートンの研究者で、マートンに深い理解を示しているポーランドのツトンプカは、SED の概念を積極的に捉え、評価度が高い。彼は、マートンの社会学的志向の中には機能的分析や構造的分析が使われ、それ以外に第三の次元として時間分析 (Temporal Analysis) が使われていると言う (Sztompka 1986: 153-156)。そして、現在の社会的現実の分析には、現在の状態に導いた因果の連鎖を振り返り、再構築する「回顧的方向」と潜在的に現在の状態に固有なものとみなして、未来の発展を計画する「展望的方向」の二つがあり、この二つの方向をとることの積極性を考えている。この分析の背景にはツトンプカがマートンに歴史意識を認めるからである。ツトンプカはこの SED の視点がマクロ構造、メゾ構造、ミクロ構造に関して有効であると考えている。彼の場合、さらに進んで自身の著である『社会変動の社会学』においても時間規範のカテゴリーとして SED を評価している (Sztompka 1993: 49)。

このように初期と後期に関しては評価が分かれるが、マートンの時間社会学全体を通してその影響を考えると、初期研究の流れはソローキン自身によってその後も研究され、そのもとで 1960 年代に時間の社会学が一時的に盛んになった時期がある。そして、この流れはいまでもゼルバベル (E. Zerubavel 1979, 1982, 2004) などに引き継がれている。これからすると SED の研究は、まだこれからかもしれない。マートンの時間社会学は、1960 年代にアメリカ社会学で多くの時間研究がされるキッカケを与え、SED もこれから研究者が増えるのではないかと思われる。

6. 結語

マートンにとって初期のころの時間の社会学は、天文学的時間と違って社会的時間が質的性格をもつ、その性格の究明を目指すものであった。行為論的な色彩をもち、予期せざる結果論を軸に研究するものであった。ここでは、主体性と社会変動的な考察が前面に出ていた。その後、マートンの社会学は、初期のころのエートス論や主体性的な社会学は鳴りを潜めて、むしろ、構造機能主義的な研究の色彩が強まっていった。1982年の「社会的に期待された持続時間」論は、行為論の視点と構造機能主義の視点の双方を秘めた理論としての性格を持った時間論に変貌している。

しかし、この考えは、1950年代にマートンが準拠集団や社会構造の研究をしているときに概念的には気づかれていたもので、マートンのSED概念の特徴は、社会的時間に対して個人的時間の存在に目を向け、それを構造分析に位置づけようとした点が特色といえる。

わが国では、昨年3月11日に起こった東日本大震災は、3種類の災害をもたらしている。この大震災の被災者たちにとっては「社会的に期待された持続時間」の概念で分析する必要が多々あるように思われる¹⁰⁾。

*本稿は、2002年12月に日本社会分析学会において発表した原稿をベースに、今回大幅に加筆・修正して上梓したものである。

<注>

- 1) 彼の社会学研究は、構造機能主義の理論、知識社会学、準拠集団論、科学社会学、コミュニティ論、ハウジング論、社会問題論、逸脱行動論、官僚制論、マス・コミュニケーション論、専門職の社会学、医療社会学、社会的差別論、知識社会学、準拠集団論、階級論などに及び、それも理論構築から実証的な調査研究まで及んだ。
- 2) マートンへの追悼文はインターネットで多数紹介された。特にアメリカ哲学会の2004年12月に出版された『予稿集』148巻にはハーバード大学のG. Holtonが14ページにわたる追悼文を寄せたことは、彼が他分野に影響をいかに与えていたかがわかるであろう。
- 3) マートンがハーバード大学に進学したのは、ソローキンに学ぶためであった。
- 4) 科学社会学の研究もソローキンの影響があることは、認めなければならない。少なくとも、17世紀のイギリスの科学者の業績の分析に対する統計的、実証的な研究は、シンプソンやパーソンズのようなヨーロッパの社会学の研究者からは学ばない方法といえる。
- 5) 三つの仮説というのは、M. ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』において提出された宗教が経済発展に寄与したとする仮説をここではウェーバー仮説、次いで、マルクスの仮説、デュルケームの仮説を指す。三つの仮説についての詳しい紹介は、辻正二『アンビバランスの社会学』の第3章を参考。
- 6) 1957年に出版された『社会理論と社会構造』の増補版(2版)の中には、1950年に執筆した「準拠集団行動の理論」と1957年に執筆した「準拠集団と社会構造の理論」の2本の論文が収録されている。
- 7) 原初的な概念とは、最初の、初歩の、特殊化され、一般には未解明のアイデアである。概念とは、一般化されたアイデアであり、それは、一端明確にされ、名前を付けられ、実質的に一般化されたもので、解明されると、表面上の多様な現象の中まで効果的な探求を可能にすることができるのである。
- 8) マリエンタルとは、ラザラスフェルドたちの書いた書物名である。後に英語で出版される。
- 9) クローザーズのマートン研究においても、「社会的に期待された持続時間」に対しては僅かのページ

しか割かれていない (Crothers 1987 : 149-152)。

10) 3つのタイプというのは、「期限付きの仮設住宅居住者」と「福島原発事故の避難者の仮設住宅居住者」、「被爆の危険性を予知しての避難者」である。期限付きの仮設住宅居住者の存在、今の仮設生活がいつまで続くのか、いつ第2の大地震があるのか等、被災地に生活している、被災者の人々は、不安と葛藤のなかでの生活が余儀なくされている。こうした事態を SED の概念（「社会的に規定された期待」、「制度化された期待」、「パターン化された一時的期待」）は問題の本質を捉えるうえで役立つのではないかと思われる。

<文献>

- (1) Durkheim, Émile, 1912, *Les formes élémentaires de la vie religieuse. Le système totémique en Australie*, Paris,(=1975,古野清人訳,『宗教生活の原初形態』,岩波書店,上巻,下巻)
- (2) Coser ,L.A. and Coser, R.L., 1963, “*Time Perspective and Social Structure*,” A. Gouldner and H. Gouldner eds., *Modern Sociology*, New York, pp.638-650
- (3)Crothers, Charles, 1987, *Robert K. Merton*, Ellis Horwood, 中野正大・金子雅彦訳,1993,『マーソンの社会学』（世界思想社）
- (4) Di Lellio Anna , 1985, *Le Aspettative Sociali de Durata: Intervesta a Robert K. Merton*, Rassegna Italiana di Sociologia, pp.3-26
- (5) Merton, R. K. 1957, 1968, *Social Theory and Social Structure*, Free Press, 森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎訳,1961,『社会理論と社会構造』（みすず書房）
- (6) Merton, R. K., 1984, “Socially Expected Durations, A Case Study of Concept Formation in Sociology,” W. Powell and R. Robbins. eds., *Conflict and Consensus: In Honor of Lewis A. Coser*, Free Press
- (7) Roberts, B.R., 1995, “Socially Expected Durations and the Economic Adjustment of Immigrants,” Alejandro Portes, ed., *The Economic Sociology of Immigration: Essays on Networks, Ethnicity, and Entrepreneurship*, New York: Russell Sage Foundation
- (8) Sorokin, P. A. & Merton, R. K., 1937, “Social Time: A Methodological and Functional Analysis,” *American Journal of Sociology*
- (9) 辻正二,2001,『アンビバランスの社会学』（恒星社厚生閣）
- (10) 辻正二,2011,「時間社会学の可能性と課題」『西日本社会学会年報』（西日本社会学会）第9号 3-20頁
- (11) Sztompka,Piotr, 1986, *Robert K. Merton : An Intellectual Profile*, Macmillan
- (12) Sztompka,Piotr, 1993, *The Sociology of Social Change*, Blackwell
- (13) Sztompka,Piotr, ed., 1996, “An Introduction,” in *Robert K. Merton: On Social Structure and Science*, Univ. of Chicago Pr., pp.1-20
- (14) Tabboni,Simonetta, 1990, “Robert K. Merton's Contribution to Sociological Studies of Time,” Jon Clark Celia Modgil, & Sohan Modgil, *Robert K Merton: Consensus and Controversy*, pp.427-436
- (15) Zerubavel, Eviatar, 1979, *Patterns of Time in Hospital Life*, Univ. of Chicago Pr.
- (16) Zerubavel, Eviatar, 1982, “Hidden Rhythms : Schedules and Calendars,” in *Social Life*, Univ. of Chicago Pr., 木田橋美和子訳,1984,『かくれたリズム——時間の社会学』（サイマル出版）
- (17) Zerubavel, Eviatar , 2004 ,*Time Maps: Collective Memory And The Social Shape Of The Past*, Univ. of Chicago Pr.

所属：山口大学人文学部

E-mail アドレス：tsuji@yamaguchi-u.ac.jp